中原中也

佐々木幹郎

近代日本詩人選 16

中原中也

佐々木幹郎

筑摩書房

佐々木幹郎（ささきみきろう）

一九四七年大阪に生れる。同志社大学中退。詩人。詩集『死者の鞭』（構造社）、『水中火災』（国文社）、『気狂いフルート』（思潮社）、『佐々木幹郎詩集』（現代詩文庫76、思潮社）、『風の生活』（書肆山田）、評論集『熱と理由』『溶ける破片』（国文社）、『詩人の老いかた』（五柳書院）などがある。

中原中也　近代日本詩人選16

一九八八年　四　月　五　日　初版第一刷発行

著　者　佐々木幹郎

発行者　関根栄郷

発行所　株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号一〇一―九一
電話　〇三（二九一）七六五一（営業）
〇三（二九四）六七一一（編集）
振替東京六―四一二三

印刷　明和印刷　製本　和田製本

©1988 Mikiro Sasaki

ISBN 4-480-13916-8 C0392

定価1800円

目次

プロローグ　〈うた〉という毒　三
第一章　口語自由詩の本質――亡びたる過去のすべて　二四
第二章　生の氾濫――大正十二年とはなにか　五六
第三章　ダダイズムとの遭遇――喪失の感情　八七
第四章　長谷川泰子と富永太郎――異質な他者　一一七
第五章　「朝の歌」まで――陶酔と離別　一四〇
第六章　『山羊の歌』――子守歌的なるもの　一八六
第七章　『在りし日の歌』――詩人のデスマスク　二三四
年　譜　二八一
使用テキスト及び主要参考文献　二八九
あとがき　二九一
函装画＝加納光於《作品》（1979　部分）

中原中也

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

プロローグ　〈うた〉という毒

鎌倉の寿福寺境内にある中原中也の晩年の家を訪れたのは、ある秋の深まった一日であった。寿福寺は鎌倉五山のひとつと言われ、本堂の背後の山を切り開いた墓地には、源実朝の墓や北条政子の墓がある。中原は昭和十二年の二月から十月まで、この寺の境内に住んだ。長男が死んだあと激しい精神錯乱に見舞われ、千葉市の病院に強制的に入院させられ、一カ月ばかりで退院した後、ここに移り住んだのである。十月に死ぬまで、わずか八カ月間の住まいであった。

今度退院しましたら郷里に連れて帰るとかお母さんは云つていらしたさうですが、僕はそれよりもやつぱり、東京にゐたいと思ひます。東京でないまでも、かねて話してゐましたやうに、鎌倉に越さうかと思ひます。それならば友達も数人ゐますし、何かと僕の気持も楽だと思ひます。家は安い空家が、いくらでもあると聞いてゐます。田舎に帰りましても、

僕の仕事にはやはり不便ですから、どうしてもやはり二ケ月に一度くらゐ東京に出て来なくてはなりますまい。勿論お母さんがどうしても連れ帰りたいのでしたら、一時帰ってもいいですが、何れまた上京しなくてはならないと思ひ乍ら帰ってゐるよりは、いつそ静かな鎌倉へ最初から越す方がよいと思ひます。

（昭和十二年二月八日付の手紙、「千葉寺雑記」）

中原は入院中にこんな手紙を母親に宛てて書いている。当時鎌倉の扇ケ谷には小林秀雄が住んでおり、その近くの鉱泉宿には大岡昇平が下宿していた。

「中也が借りた家というのは」、と母親の中原フクは回想している。

扇ケ谷（おうぎがやつ）の寿福寺（じゅふくじ）境内にある六畳二間と四畳半と台所のある小さな家でした。それは日本橋かどこかの材木屋さんが建てた、別荘だったそうです。

（『私の上に降る雪は』）

小林秀雄は「小さな陰気な家」だったと、この家の様子を語っている。

彼の家庭の様子が余り淋し気なので、女同士でも仲よく往き来する様になればと思ひ、家内を連れて行った事がある。真夏の午後であった。彼の家がそのまゝ這入って了ふ様な凝

灰岩の大きな洞窟が、彼の家とすれすれに口を開けてゐて、家の中には、夏とは思はれぬ冷い風が吹いてゐた。四人は十銭玉を賭けてトランプの二十一をした。無邪気な中原の奥さんは勝ったり負けたりする毎に大声をあげて笑った。皆んなつられてよく笑った。今でも一番鮮やかに覚えてゐるのはこの笑ひ声なのだが、思ひ出の中で笑ひ声が聞えると、私は笑ひを止める。すると、彼の玄関脇にはみ出した凝灰岩の洞穴の縁が見える。滑らかな凸凹をしてゐて、それが冷い風の入口だ。昔こゝが浜辺だった時に、浪が洗ったものなのか、それとも風だって何万年と吹いてゐれば、柔らかい岩をあんな具合にするものか。

（「中原中也の思ひ出」）

中原の晩年のその家は、寿福寺の山門からしばらく脇へ入ったところにあった。小さな池が家の前にある。ああこれが……とわたしは声にならぬ声をあげた。詩集『在りし日の歌』に「蛙声」という作品がある。

天は地を蓋(おほ)ひ、
そして、地には偶々(たまたま)池がある。
その池で今夜一と夜さ蛙は鳴く……
――あれは、何を鳴いてるのであらう？

その声は、空より来り、
空へと去るのであらう？
天は地を蓋ひ、
そして蛙声は水面に走る。

よし此の地方が湿潤に過ぎるとしても、
疲れたる我等が心のためには、
柱は猶、余りに乾いたものと感はれ、

頭は重く、肩は凝るのだ。
さて、それなのに夜が来れば蛙は鳴き、
その声は水面に走つて暗雲に迫る。

（「四季」昭和十二年七月号に初出。同年五月十四日制作）

重苦しい詩である。中原はこんな詩を『在りし日の歌』の最後に入れた。「地には偶々池がある」だって？　まさしく彼の家の前には池があった。しかし彼はこの池を歌ったのではない

だろう。たまたま「地」（この世）にあったのは、中原中也自身なのだ。梅雨時の蛙の声を聞きながら、中原は自分自身を水溜まりのように考えている。なんだかそんなことが、秋の陽に照らされた小さな池の、淀んだ水面を見つめていると沁み入るように伝わってきた。

彼の詩の言葉は「水面」を走るように、「天」と「地」のあいだを漂い続けた。誰がその声を聞いただろう。

生きているあいだ、この男は「ご尤もな綿入れの唇」をしていて「人を食う鬼」であった。友人の一人、青山二郎はそう言っている。その「唇」が含んでいるものを見つめて小林秀雄は、この男は「自分の告白の中に閉ぢこめられ、どうしても出口を見附ける事が出来なかつた」と言った。河上徹太郎はこの男を「見事なアウトサイダー」である、と言った。大岡昇平は、「ご尤もな綿入れの唇」が人間の存在の根につきささる「不幸」という問題を運んできた、と言った。友人たちによって中原中也は切り子細工のように刻まれている。生きていたときの印象があまりに強烈だったからである。刻んでも刻んでも、この男は磨滅しないように出来ていた。しかし、磨滅しない人間など何処にもいないので、中原は最後は「ざふきんの様に使ひ荒されて」（青山二郎）死んだ。

小林秀雄が「中原中也の思ひ出」に書いていたように、中原の晩年の家の玄関脇には、凝灰岩の岩肌が迫っていた。まるで小さな家を圧するように、不思議な岩肌の崖が玄関に向かって迫り出してきている。「滑らかな凸凹をしていて」と小林は書いているが、その凸凹模様は複

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

雑怪奇な横皺を幾重にも持っていて、その皺を眼で追っているうちにわたしは気分が滅入ってきた。岩肌は海蝕作用と風化作用の双方を受けて、風に揺らぐカーテンのように褶曲している。人の心が不安定な時、この岩肌を見ていたらますます心の迷路に誘われるように思える。小林が言う「小さな陰気な家」という印象は、中原家の家庭の様子からということもあっただろうが、家を取り囲むこういう周りの風景からもきていたのではないか。

明るい秋の陽差しを浴びてわたしが訪ねた日の岩肌は白く輝いていたが、これが曇り日でもあれば陰々滅々たる雰囲気を持つことだろう。中原中也は毎日この岩肌を見ていたのである。

岩肌の下部には大きな洞窟が掘られている。たぶん中世から続いたものだろう。その中を覗くと大小さまざまな古い石塔が並んでいて、墓地になっている。陽の射さぬその洞窟の奥へ入ると、それほど深くはないのに空気がひんやりと冷たい。そこから中原の晩年の家の瓦屋根とは指呼の間だ。石塔が黒いシルエットになって、家はまるで墓石に見守られて建っているかのようだった。

どうしてこんなところに住んだのだろう？　精神病院から退院してきた直後の人間が住むのにふさわしい場所だとは到底思えない。

しかしもしかすると、こういう淋しげな風景こそ晩年の中原が呼び求めたものかもしれなかった。あるいは彼は吸い寄せられるようにして、この褶曲した岩肌と墓石に囲まれた風景に近づいていく。ここでこそ彼の精神はバランスを取り戻したのかもしれなかった。

2

イギリスの十九世紀末から二十世紀初頭を生きた小説家G・K・チェスタトンは、逆説や警句を駆使した文芸批評の名手でもあったが、彼は詩人と狂気をめぐって面白いことを言っている。

> 想像は狂気を生みはしない。狂気を生むのは実は理性なのである。詩人は気ちがいになりはしない。気ちがいになるのはチェスの名人だ。数学者は気ちがいになる。それに出納係。だが創造的芸術家はめったにならない。私は別に論理を攻撃しているのでは毛頭ない。（中略）ただ、気のふれる危険は論理にあって想像にはないと言うだけだ。詩を生むことは子を生むことと同様健康の印である。
>
> （『正統とは何か』福田恆存・安西徹雄訳）

この言葉を思い出すとわたしはいつも愉快になる。詩が「健康の印」であるかどうかはともかく、チェスタトンは想像の世界と理性の世界の双方をうまく飼い馴らしているなと思うからだ。中原はどうだったのか。驚いたことに、中原もチェスタトンと同じようなことを言っている。

「理性」を尊重しない限り凡ゆる「契約」は成立しまい。だから契約の必要なる度に応じては理性を尊重するよりほかもない。然し、私の魂が求めてゐるのは契約ではない、幸福である。好都合ではない、在るが故に在る底の喜悦である。勿論その喜悦たるや「悲しみの中の喜び」と謂はれる所の喜びであつても結構だ。　（「日記」昭和十年九月二十八日）

中原の散文は読みにくい。言いたいことを言おうとして、やつぎばやに言葉を発しているので、いつもつんのめっているような印象を受ける。彼の詩の読み易さとは大きな違いだ。これは実生活面での彼の性格ともつながっていることなのだが、それはともかく、ここで彼は理性の世界を否定するのではなくそれを飼い馴らすことを「契約」と言っている。そして「魂が求めてゐる」もの、つまり想像の世界にあるものは、「幸福」あるいは「喜び」であると言っている。

中原が生涯をかけて詩の中に追い求めたものは、決して狂気とつながるものではなかった。むしろ狂気とは逆さまの、人の心を慰藉する「何か」だった。それを中原自身はしばしば「魂」という言葉で呼んだ。

自分に、方法を与へようといふこと。これが不可(いけ)ない。どんな場合にあるとも、この魂

はこの魂だ。

（「日記」昭和二年一月十九日）

中原の口にかかると「魂」は何か具体的な、実体を持ったもののように響く。それはどんな姿をしていたか。

頭を、ボーズにしてやらう
囚人刈りにしてやらう

ハモニカを吹かう
殖民地向きの、気軽さになつてやらう

荷物を忘れて、
引き越しをしてやらう

Anywhere out of the world
池の中に跳び込んでやらう

車夫にならう
債券が当つた車夫のやうに走らう

貯金帳を振り廻して、
永遠に走らう

奥さん達が笑ふだらう
歯が抜ける程笑ふだらう

Anywhere out of the world
真面目臭(くさ)つてゐられるかい。

（未刊詩篇「頭を、ポーズにしてやらう」、制作年次推定昭和七年）

ひとりの詩人の作品系列からははずれるが、きわめて突飛なかたちで、しかも彼の特徴を明瞭に示すようにして、暴発したように書かれてしまった作品。中原中也の詩集は、生前に刊行された『山羊の歌』（昭和九年）と、死後に刊行された『在りし日の歌』（昭和十三年）の二冊だけだが、これらの詩集に収録されなかった未刊詩篇の中には、作者の精神のアンダーグラウン

ドをそのまま露呈させた作品が少なくない。「頭を、ボーズにしてやらう」もその内のひとつだが、最終二行、

Anywhere out of the world
真面目臭つてゐられるかい。

には、この詩人の魂の姿がよく浮かびあがっている。「真面目臭つてゐられ」ないものが、彼の想像の世界であった。そしてこの想像の世界には落とし穴がひとつあった。想像している自分自身の姿が、本人からはよく見えないということである。どこかで距離を失っていて、その分過剰なほどの自分自身への信頼を持たねばならなかった。チェスタトンの言葉をもうひとつ引こう。

詩人の望みはただ高揚と拡大である。世界の中にのびのびと身を伸ばすことだけだ。詩人はただ天空の中に頭を入れようとする。ところが論理家は自分の頭の中に天空を入れようとする。張り裂けるのが頭のほうであることは言うまでもない。（『正統とは何か』）

想像の世界を自由に羽ばたかせようとするとき、人は理性の限界を知らねばならない。「頭

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo